

陰囊平滑筋肉腫の1例

大阪府立病院泌尿器科（部長：新 武三）

多	田	安	温
橋	中	保	男
門	脇	照	雄
高	杉		豊
新		武	三

大阪府立病院病理検査科

虎 頭 廉

LEIOMYOSARCOMA OF THE SCROTUM: A CASE REPORT

Yasuharu TADA, Yasuo HASHINAKA, Teruo KADOWAKI,
Yutaka TAKASUGI, Takezo SHIN and Kiyoshi KOTO*

From the Department of Urology and Pathology, Osaka Prefectural Hospital*

A case of leiomyosarcoma of the scrotum in a 58-year-old man is presented. The tumor measured $3 \times 3.5 \times 4$ cm and had been present as a slowly enlarging mass in the left scrotum for six months prior to excision. Wide local excision was performed. Light microscopy demonstrated the typical interlacing fascicles of neoplastic cells with eccentric cigar-shaped nuclei. A review of the world's literature revealed this to be the sixth reported case of leiomyosarcoma confined to the scrotal wall. Patient is doing quite well without any evidence of recurrence at present almost ten months following surgery.

陰囊肉腫はまれな腫瘍である。傍辜丸肉腫と呼ばれる辜丸鞘膜・副辜丸・精索から生じる肉腫を除いて、陰囊壁から生じる肉腫に限定すれば、今までに世界でわずかに5例の平滑筋肉腫が報告されており、本邦では、調べたかぎりでは初めてである。われわれは、第6例目の陰囊平滑筋肉腫を経験したので、報告するとともに若干の文献的考察を加える。

I. 症 例

患者：K. F., 58歳，男

主訴：左陰囊部腫瘍

初診：1979年3月7日

家族歴および既往歴：特記すべきことなし

現病歴：1978年9月ごろから左陰囊部腫張に気が付き、同年12月ごろから増強したが、放置していた。1979年2月末に、近医を受診し、投薬をうけた。腫張が軽減しないため3月5日に再度受診し、左陰囊穿刺を受けたが、何も吸引できず、左陰囊底部が、穿孔し

た。左陰囊を圧迫され、組織塊が押し出された。3月7日に当科を受診し、緊急入院となった。

現症：身長は159.3 cm，体重は68 kg。頭部，顔面には異常なし。胸腹部には理学所見上異常なし。陰茎に異常を認めず，直腸診でも異常なし。右陰囊内容は異常なし。左陰囊は，潰瘍状に直径約2 cmの皮膚欠損が認められ，血塊で満たされていた。腫瘍は陰囊自体に存在し，陰囊内容とは区別できた。体表の異常リンパ節は，触知せず。

入院時検査成績：尿蛋白（—），尿糖（—），尿沈渣；異常なし，尿細胞診；陰性，血沈46 mm（1時間値），80 mm（2時間値），CRP；2+，電気泳動；Alb. 54.5%， α_1 5.1%， α_2 11.6%， β 14.9%， γ 13.6%。血液所見；血色素量14.1 g/dl，ヘマトクリット40.5%，赤血球数 $449 \times 10^4/\text{mm}^3$ ，白血球数 $6,500/\text{mm}^3$ （桿状核13%，分葉核54%，好酸球6%，好塩基球1%，リンパ球21%，単球5%），血清総蛋白7.4 g/dl，アルブミン4.6 g/dl，A/G 1.6，尿素窒素7 mg/dl，クレア

チニン 0.3 mg/dl, 尿酸 4.7 mg/dl, Na 144 mEq/L, K 4.4 mEq/L, Cl 104 mEq/L, Ca 8.6 mg/dl, P 2.6 mg/dl, 総コレステロール 206 mg/dl, 総ビリルビン 0.6 mg/dl, Kunkel 試験 4.7 u, TTT 0.9 u, GOT 18 u, GPT 16 u, アルカリフォスファターゼ 8.5 u, LDH 60 u, γ -GTP 35 mu/ml, FBS 106 mg/dl, アミラーゼ 186 u. 胸部 X 線所見は著変を認めず. 腹部単純 X 線像, 排泄性尿路造影像の所見では, 腰椎の両側に異常石灰化陰影が多数認められるが, 尿路には異常を認めなかった (Fig. 1).

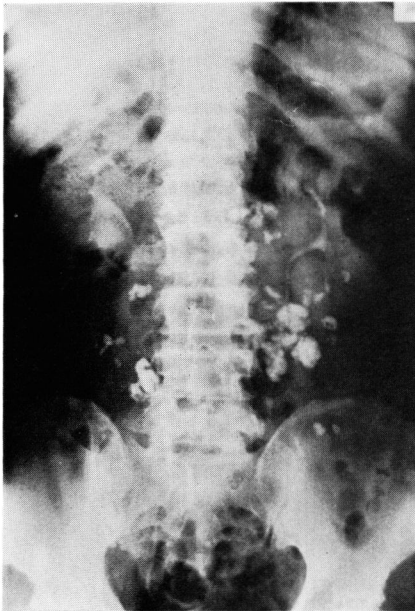


Fig. 1. 排泄性尿路造影像: 石灰化陰影は尿路とは無関係である

逆行性尿道造影でも異常なし. リンパ管造影は施行しなかった.

手術所見: 陰嚢血腫の術前診断のもとに, 3月8日腰椎麻酔にて左鼠径部から左陰嚢にかけて約 5 cm の切開を加えた. 陰嚢内容は異常なく, 固有鞘膜を開くと, 黄色やや混濁した液体が少量流出した. 陰嚢内容との癒着はなく左陰嚢壁内に腫瘍と血塊が認められ, 腫瘍は陰嚢皮膚と強く癒着していた. 皮膚も一部含めて腫瘍を一塊として摘出した.

病理組織検査にて陰嚢平滑筋肉腫と診断されたため, 3月14日腰椎麻酔にて, 左高位除睾術および左陰嚢切除術を行なった. 手術創は一次的に治癒し, 患者は術後18日目に略治退院した.

病理所見: 腫瘍は境界が不鮮明で, 被膜は認められず, $3 \times 3.5 \times 4$ cm 大であった. 断面は均一で, 黄白色であり, 出血巣がところどころに認められた (Fig. 2). Fig. 3 は, ヘマトキシリン-エオジン染色の腫瘍の弱拡大であるが, hypercellular に紡錘形の細胞が縦横に走行して増殖している. Fig. 4 は, 強拡大であるが, 細胞質は好酸性で核の大小不同があり, 細胞分裂も多く見られる. 中には bizarre cell が認められる. 核は先端が鈍となり, 特徴的な cigar-shaped である.

腫瘍は, 陰嚢の上皮下組織まで浸潤していた. 2度目の手術でえられた標本には, ところどころに出血と膿瘍を認めるのみで, 平滑筋肉腫は認められなかった.

II. 考 察

陰嚢壁に限られた平滑筋肉腫は, Johnson ら⁴⁾の報告によると今までに5例が報告されており, われわれ

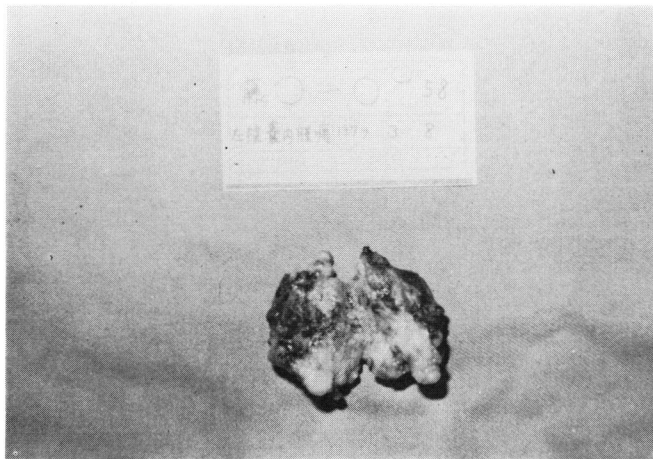


Fig. 2. 摘出標本断面

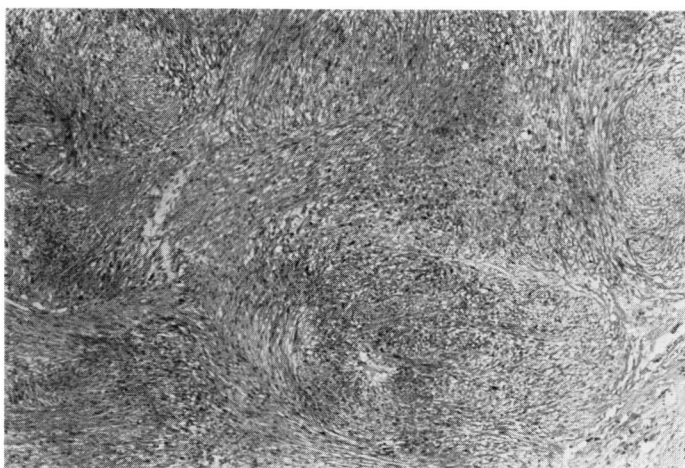


Fig. 3. 病理組織像；×40 (H-E 染色)

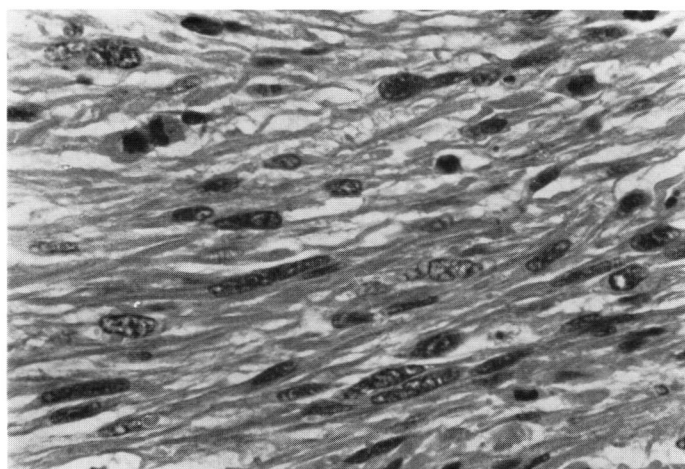


Fig. 4. 病理組織像；×200 (H-E 染色)

の症例は、6例目にあたる (Table 1)。

今までに報告された症例では、年齢は38歳から89歳で、腫瘍にきづいてから受診までの期間は、3カ月から数年となっている。

治療は、大部分の症例が orchiectomy を含めた wide local excision が行なわれており、予後は、症例が少ないので何とも言えないが、おおむね不良である。われわれの症例は、術後10カ月間の経過観察で、局所的にも胸腹部理学所見上にも何らの再発所見を認めていない。

Castellano と Ruffolo⁵⁾ は、陰嚢壁に局限した肉腫と精索や睾丸の肉腫とは、治療法が大きく異なることを指摘している。これはリンパ管の走行に基づくもので、陰嚢壁からのリンパは、鼠径部を経て外および内腸骨リンパ節へ注ぐのに対して、睾丸や精索から

のリンパは、蔓状静脈叢に沿って、傍大動脈あるいは後腹膜リンパ節へ注ぐ。したがって、陰嚢壁に局限した腫瘍に対しては、wide local excision を行ない、臨床的に病的リンパ節が触れるなら、鼠径部に照射を行なうことを主張している。最近では、さらに積極的な治療がすすめられ、予防的に鼠径部リンパ節郭清を行なうべきであるとする意見もある³⁾。化学療法については無効という症例もあるが、まだ症例が少なく確立されていない。

Ⅲ. 結 語

58歳男性の陰嚢平滑筋肉腫の1例を経験したので報告した。これは世界で第6例目と思われる。wide local excision を行なったが、術後10カ月を経た現在、なんらの再発所見も認めない。

Table 1. Patient data.

Investigator	Year	Age of patient	Duration of symptoms	Treatment	Follow-up
Immergut et al. ¹⁾	1965	38	4 years	Local excision	Died 2½ years after initial diagnosis with metastases
Sikorowa and Proniewicz ²⁾	1969	43	3 years	Right hemiscrotectomy with excision of right testis and adnexa	No follow-up
		64	2 years	Left hemiscrotectomy with excision of left testis and adnexa	No follow-up
Ray et al. ³⁾	1972	67	many years	Local excision: excision of scrotum, both testes and adnexae. 2 months later following recurrence of tumor	Died 8¾ years after initial diagnosis with metastases
Johnson et al. ⁴⁾	1978	89	3 months	Biopsy: 15 days later, wide local excision	Died 1 month later initial diagnosis from unrelated disease
Our case	1979	58	6 months	Local excision: left hemiscrotectomy with excision of left testis and adnexa	Alive 10 months postoperatively

本論文の要旨は第88回日本泌尿器科学会関西地方会において発表した。

文 献

- 1) Immergut, S., et al.: Leiomyosarcoma of scrotum: Case report. *J. Urol.*, **93**: 479, 1965.
- 2) Sikorowa, L., and Proniewicz, K.: Leiomyosarcoma scroti. *Nowotwory*, **19**: 117, 1969.
- 3) Ray, B., et al.: Unusual malignant tumors of

the scrotum: Review of 5 cases. *J. Urol.*, **108**: 760, 1972.

- 4) Johnson, S., et al.: Leiomyosarcoma of the scrotum: A case report with electron microscopy. *Cancer*, **41**: 1830, 1978.
- 5) Castellano, G. C., and Ruffolo, E. H.: Lipofibromyxosarcoma of the scrotum. *Arch. Surg.* **104**: 842, 1972.

(1980年1月25日受付)